創世記の記録

第２部 創造主が造られた世界

Ⅶ／大洪水

著／ヘンリーモリス

訳／宇佐神　正海

ー 1976 年版ー

第2部　創造主の造られた世界

Ⅷ　大洪水（創世記七～八章）

古い世界の最後の時

神は、ノアにほぼ百年前に語りかけ、箱船や動物に関する指図を与え、洪水が実際に計画通りやってくることを保証しました。それ以来、天からのことばはありませんでしたが、ノアは固く信仰を保って、神の命令に疑問を持たないで従い、彼に与えられた独特の使命と伝道の働きを続けていきました。すべての可能な方法を用いて、毎年毎年、ノアは来るべきさばきを宣べ伝えました。しかし、だれ一人として悔い改める人が起こされませんでした。

ついに、箱船が完成し、動物たちのすべてが集まってきました。百二十年目は、あと数日に迫っていました。かつて生きた人の中で、最も長生きして主に仕えた彼の祖父メトシェラは、死の床に就いていました。その時、百年間の沈黙を破って、神がもう一度ノアに語りかけられました。ノアは本当に、「家族の救いのために」箱

船を準備しました（ヘブ一一・七）。

七章一節　主はノアに言われた、「あなたと家族とはみな箱船にはいりなさい。あなたがこの時代の人々の中で、わたしの前に正しい人であるとわたしは認めたからである」。（協会訳）

主は、ノアに、「あなたと家族とはみな箱船にはいりなさい。あなたがこの時代の人々の中で、わたしの前に正しい人であるとわたしは認めたからである」と仰せられました。ノアは神のことばに従って、信じるところを行ない（ヘブ一一・七）、神の命令に断固として従い、信仰を示したので、神は彼を義と認めて、彼と彼の家族の両方を救いました。これが一家の長である人にとっての神の恵みに満ちた用意であり、約束なのです。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使一六・三一）。

主が、「箱船にはいって行きなさい」ではなく「はいって来なさい」（英語の動詞は come、すなわち、「入って来なさい」となっている）と言われたことにも深い意味があります。神は彼らと一緒に箱船におられました。間もなく壊滅的な洪水が荒れ狂おうとしていたにもかかわらず、彼らは主とともにいて安全だったのです。

ノアの信仰と服従のゆえに、神はノアの家族に対して約束をしたのですが、彼の家族も一人一人、信じて救われました。一人一人が、自主的に箱船に入り、非常に長く住んでいたこの世を拒否することを選び取りました。ノアが箱船の建造資金を出すことのできる非常に富んだ人であったことは疑いありません。しかし、彼と彼の息子たち、そして、彼らの妻たちは、喜んでそれらすべてを置き去りにしました。なぜなら、彼らは、神は約束されたことを実行されると信じていたからです。人間の自由な選択と神の選びの恵みとのバラ

ンスは、人間の限りある理解力からは、決して計り知れないものです。しかし、両方とも真実です。ノアの家族が自発的に箱船に入ることを選び取る（七・七）はるか以前に、神はノアに、家族が救われる（六・一八）と約束しました。そして、彼らは、時が来て、実際に箱船に入ることにしました。

七章二～三節　あなたはすべての清い獣の中から雄と雌とを七つずつ（欽定訳では七匹）取り、清くない獣の中から雄と雌とを二つずつ取り、また空の鳥の中から雄と雌とを七つずつ取って、その種類が全地のおもてに生き残るようにしなさい。（協会訳）

ノアに時が来ると告げた直後、神はすべてのきよくない動物から一つがいずつ、きよい動物から七匹ずつの動物を「全地の面で生き残るため」に箱船に乗せるように指図しました。もちろん、その指示を与えた目的は、もし、洪水が全世界に及ぶものであれば意味がありますが、洪水が局地的なものであれば、無意味なものです。きよい動物には、いくつかの「けもの」と「鳥」がいましたが、明らかに「はうもの」は、入っていませんでした。きよい動物は、家畜として飼えるものや、人間のペットにするのにふさわしいものや、人間の罪の贖いのための犠牲のささげ物にふさわしいものであったと判断してよいようです。

それ以前には、創世記で「清い」動物と「清くない」動物の分類が与えられていなかったので、神がノアに、ノア自身の判断で選ぶことを許されたと考えるのが、恐らく最も合理的です。三組のつがいは、洪水後、きよい動物が人間と同様、三組の生き残った夫婦と共に比較的多く増え広がるのを助けるためでした。そのため、恐らく、非常に多くの遺伝因子を持つように考慮してあって、後で必要に応じてより多くの変種が生じ得る

ようになっていました。各々のきよい種類に、七番目の動物を用意した意図は、犠牲をささげるためであったことは明らかです。ずっと後になって、モーセの律法では、イスラエル社会で、どの動物がきよい動物とみなされるべきかを、簡単明瞭に説明しています（レビ一一章など）。しかし、クリスチャンの間では、このような区別はすべて、ことごとく取り去られているのです（使一〇・九～一五、Ⅰテモ四・四）。

七章四～五節　「それは、あと七日たつと、わたしは、地の上に四十日四十夜、雨を降らせ、わたしが造ったすべての生き物を地の面から消し去るからである。」ノアは、すべて主が命じられたとおりにした。

次に、神は、どちらかと言えば予想外の宣言をされました。地上に実際に洪水が来るまでに、まだ七日あると言われました。これは一義的に、ノアにとって確かに最後のこまかい準備のためでした。動物たちをそれぞれの「住みか」に落ちつかせ、食糧を与える等々、そして恐らく、不信仰な世に対して、最後の警告を与えるためだったことでしょう。また、メトシェラの埋葬後の哀悼の期間でもあったでしょう（五〇・一〇参照）。

しかも、神は、七日たてば、ものすごい豪雨が四十日四十夜、地にたたきつけられるように降って、すべての生き物を「地の面から」消し去ると、ノアに請け合ったのでした。四十日間世界中に降り続く雨というのは、今日の気象状態からは、全く不可能です。それゆえ、この現象が起こるためには、現在の大気中にある水によって生ずる雨とは異なる、水の源が必要でした。これはすでに私たちが検討してきたように「大空の上にある水」のことで、洪水前の世界に温室効果を維持していた目に見えない水蒸気からなる巨大な暖か

いおおいでした。どういうわけか、この大空の上の水蒸気が集まって、地上に落ちてきたのです。

神はまた、乾いた地の上にいるすべての生命あるものを、文字通り地の面から「滅ぼす」と啓示されました。これは、小さなことではありません。この天からの水は、地球全体を浸し、その堕落した世を完全に洗い清めました。「すべての生き物」と訳されていることばは、ヘブル語の kol yequm コール・イェクームで、文字通りには「すべての存在」とか「すべての育つもの」を意味します。この概念自体は、ただ「いのちの息ある」すべてのものだけという限界を示すものではなく、動物と植物をも含めているようです。

土地はすっかり水浸しになり、荒れ果てて草木も生えないほどになりました。洪水前、青々と繁っていた森林や牧場は、すべて根こそぎにされ、洗い流され、堆積物（これら堆積物は洪水後のいつか石灰層になったことでしょう）の中に埋められるか、そうでなければ、ただ腐敗し、ちりにもどったのです。

神が指図を終えられた時、ノアはちょうど百年以上にわたってしてきたように、「ノアは、すべて主が命じられたとおり」行ないました。ここに、最後の試験、すなわち神の恵みに自分自身を完全にゆだねて、ノアが知っていたこの世との最終的決別がありました。そして、この時もまた、ノアは、何のためらいもなく、神に従いました。

七章六～九節　さて洪水が地に起こった時、ノアは六百歳であった。ノアは子らと、妻と、子らの妻たちと共に洪水を避けて箱船にはいった。また清い獣と、清くない獣と、鳥と、地に這うすべてのものとの、雄と雌とが、二つずつノアのもとにきて、神がノアに命じられたように箱船にはいった。（協会訳）

この時点で、著者たち（予想ではノアの息子たち）は、その事態の荘厳さを記すことを止め、その時のノアの年齢を取り扱っています。実際、この日、洪水前の世界は終わり、洪水後の世界が始まったのです。洪水はまだ始まっていませんでしたが、ノアの家族と動物たちが箱船に入ったことで、彼らは、最終的に外の世界から全く切り離されたのです。その瞬間から、神が恵みのうちに取り扱われたすべてのものにとって、新しい秩序が始まったのです。

神の約束と命令の一つ一つが文字通り実行されようとしていることを強調するために、物語は、箱船に乗ったすべてのもの、すなわち、ノア、彼の息子たち、ノアの妻、息子たちの妻、きよい動物、きよくない獣、鳥、はうものを実に整然と列挙しました。これらのものは、神がノアに指図された通りのものでした。すべてのものは、計画通りに、今や、箱船に乗り込みました。各種類の動物の代表は雄と雌で、こうして創造された種はすべて洪水を通して生き残ることができました。すべてのきよい動物は、さらに二組のつがいと犠牲のための一匹が乗り込みました。すべてのことは、命令された通りに行なわれました。

七章一〇～一二節　それから七日たって大洪水の大水が地の上に起こった。ノアの生涯の六百年目の第二の月の十七日、その日に、巨大な大いなる水の源が、ことごとく張り裂け、天の水門が開かれた。そして、大雨は、四十日四十夜、地の上に降った。

これらの準備はすべて、洪水がやって来る「ちょうどその同じ日」（二節）に整いました。七日間（四節）という最後の恵みの期間は終わり、さばきの時が来ました。その正確な日付は実際に記録されていて、「第二

の月の十七日」でした。洪水がやって来た日付に関しては、当時どんな暦が使われていたか、あるいは、後にユダヤ宗教暦に合わせて編集する時にモーセが修正したかも知れないという疑問が起こります。このことを確かめるのは、恐らく不可能でしょう。

しかし、聖書はすべて、神の霊感によるものですから、日付を正確に記録したことにも、何らかの理由があったに違いありません。ユダヤの暦は、大部分の古代暦がそうであったように、晩秋に始まったことが知られています。それはきっと、農作物の刈入れ時と一致してのことでしょう。もちろん、ユダヤ人は暦をアダムの創造の日に合わせようとしました。七章までに記されている、年代順の情報の最も自然な解釈は、他にどんな日付に関する情報もないことから、創造と共に時間の計測がはじまったということでしょう。この場合、入手可能な資料によれば、大洪水は創造後一六五五年と一か月と十七日で来たという結論になります。しかし、このように正確な計算は、創世記五章でそれぞれの息子は、ちょうど父親の誕生日に生まれたという仮定に基づいています。このような仮定は、全くありえないことです。それゆえ、この箇所の目的は、洪水が来たのが創造後正確に何日目であったかを示そうとしたのではないように思われます。

しかしながら、なお、ここに記された月日は、創造の日付に基づく暦を指す可能性があります。その場合は、推測すると創造された時は、今で言う晩秋、恐らく十月に当たり、洪水は十一月末か十二月にやって来たということになります。一方、モーセが後になって、それらの日付をユダヤの宗教暦に付け加えたのなら、創造は恐らく四月で、洪水は五月末か六月だったでしょう。この問題については、八章四節との関連において、後で検討します。

いずれにしても、この記事は預言された洪水前の世界の終末を告げるある特別な日を強調しており、その

日に「巨大な大いなる水の源が、ことごとく張り裂け、天の水門が開かれた」のです。この出来事は地質学と非常に深い関わりがあり、地球の歴史を科学的にまた同時に聖書的にきちんと理解するには、この記述が意味するところを正確にとらえることが非常に大切なのは明らかです。

洪水前の水の循環は、今日のものとは全く異なっていた事実を私たちはすでに検討してきました（二・六～八、二・五、一〇～一四、五・五などを参照）。この洪水前の水の循環は、二つの実に巨大な貯水場によって調節されていたようです。この二つの貯水場は原初の「大いなる水」（ヘブル語でヨテホーム、創一・二）が、創造の二日目に初めて分けられて「大空の上の水」と「大空の下の水」となったもので、この場合の大空は大気圏の天から成っていました。詩篇一四八篇四節で、「天の上にある水」とも呼ばれている「大空の上の水」は、地球を美しい温室状態に保つ広大な水蒸気（気体）の天蓋を構成していました。この温室は、低温やその結果起こる暴風雨を防いでいました。この天蓋は気体の状態だったので、完全に透明で目には見えませんでしたが、それにもかかわらず、宇宙空間に向かって広がっていて、極めて大量の水を含んでいました。

「大空の下の水」は、「深淵」とか「深い水」と言われるものになりました。この水は、液状で、洪水前の海（一・一〇）や川（二・一〇～一四）の状態であったので、最初の人にとって特にはっきりしていました。これらの川は、降雨による水はけ作用によって生じたものではなく（創二・五）、よく調整された噴水または泉、すなわち、明らかに地殻の中または下に深く位置する源から出現していました。箴言八章二四節やたぶんヨブ記三八章一六節にも、深淵の泉からわき出る水の供給が豊かであることに関する興味深い言及があります。このような地下の貯水池は、互いに連絡し合っていただけではなく、川の流れ込む地上の海とも連絡していて、これら全体が一つの複雑な「深淵」を形成していたことでしょう。

再び水に圧力をかけ、循環させるためのエネルギーは、創造の際にそこに埋め込まれた地球自体の地下熱から来たに違いありません。このしくみ全体は、すばらしい熱機関であり、地球内部の熱が持続している限り、また、貯水池、弁、調節器、導入管などがその構造を保っている限り、すばらしい効率をもって無限に働いたに違いありません。その機関の詳細な設計は明らかにされていませんが、このような系は、水力学的、熱力学的にきわめて適切であり、創造主がお造りになった地球のためにこのようなしくみを準備する能力を創造主が持っていたことは確かです。

しかしながら、この世の滅亡の時が到来した時、要求されたすべては、最初に創造された時のように、二つの「深淵」をもう一度いっしょにすることでした。大空の上の水は、液化して落下しなくてはなりませんし、一方、地殻の下の水は突然その境界を破り、地上に再び流出しなければなりませんでした。神が大洪水をどのようにして起こされたかの詳細について、いろいろな学者たちが想像をたくましくして、さまざまな臆測をしてきました。あらゆる種類の大激変が示唆されました。すなわち、地軸の突然の傾斜、小惑星や阻石の地球への衝突、突発的な地殻変動、地球外宇宙空間からの来訪者によってもたらされた核爆発、宇宙をさまよっている惑星や彗星その他の星が地球に異常接近した結果生じた重力や、電磁力などです。もちろん、これらのすべては、大いに想像力を働かせた結果で、全く証明することはできません。

大洪水の因果関係を説明するに当たって次のことを心にとめておくと役に立ちます。すなわち、オッカムのかみそり（すべてのデータを説明する最も単純な仮説が最も正しいようである）、運動最小の法則（普通、自然はある特定の成果を出すためには最小限の動きしか用いないように作用する）や奇跡節約に関する神学原理（全知全能をもって、神は実に効率よく働く宇宙を創造された。そして、自然界の諸原理が、ある場面

で神の目的を果たせなくならない限り、神は超自然的に自然界の働きに干渉されない）などです。

神が、すべての出来事を奇跡をもって成し遂げようとすればできたということに、何の疑問もありません（たとえば、洪水の水を特別に創造し、洪水が終わった時に、その水を「消し去る」など）が、このようなことは必要ではなかったし、それゆえ、神学的観点からもありえないことでした。同様に、小惑星の衝突や軌道をはずれた一連の「星間旅行者」の接近という提案では、タイミングが実に摂理的とでもいうべくちょうどよい時に起こったという以外には、超自然的な介入を必要としなかったはずです。

少なくとも洪水の原因として、このような現象があったことを示唆する記録は、聖書には全くないので、最もありそうにないことです。

聖書は、ノアの大洪水の原因を、特に、巨大な深淵の水の源がことごとく張り裂け、どしゃ降りの雨が天から降ってきたためだとしています。すでに検討したようにこれら二つの現象で、聖書に述べられている関連ある情報に照らして、洪水とその影響を説明するのに十分です。超自然的な創造という奇跡や神のみこころにより注文通りに地球外からの干渉があったとする空想的な出来事のいずれにも頼る必要はないのです。

巨大な大いなる水の源がことごとく張り裂けた（文字通りには、裂けながら開くという）ことが、最初に述べられており、これが残りの現象の引金になった最初の動きであったことは明らかです。

これら水の源の間をつないでいる水路は、どういうわけか、この日に調整不能に陥り、すべて破裂してしまいました。このような世界中に及ぶ顕著な現象には、世界的な原因があったに違いありません。最もありそうな原因は、地下の水脈全体に及ぶ急激な水圧の上昇と搏動であったと思われます。これが、順次、この系全体にわたっての急激な温度上昇をもたらしたと推定されます。今日でさえ、地球内部の奥深くの性質や、

その熱活動の性質については、ほとんど知られていません。

そのため、何が実際にこのような温度上昇の引金になったか、断定することはできません。重元素による核反応、圧力と温度が非常に高くなり過ぎた時に、突然地層の破壊をもたらすような地殻の深部にある熱を遮断するある種の層に対しての温度のゆるやかな上昇、地震や火山活動のさまざまな組み合せなど、多くの可能性が指摘されます。

いずれにしても、大ざっぱに前述したような一連の出来事が実際に起きたとするならば、地殻には、特に、強烈な火山活動、変成作用、過去に起こった構造活動（構造活動・地殻を構成する地層が岩石の移動や変形によって生ずる活動のこと）、その他によって生じた地殻の「結晶基盤」（結晶基盤・堆積岩の層の下にある地殻の層で、火成岩や変成岩からなる）などを、見いだし得ると推定される実に豊富な形跡があるのです。

また、時と環境に関して摂理のうちに定められていたという意味では、これらの現象のうちのいくつかは奇跡であった可能性があります。しかしながら、もしそうであるなら、神のみこころによって起こった奇跡のうちに入り、それは少なくとも地球内のことで、聖書の説明と直接の関係があったのであり、地球外のものではなく、偶発的に、起こったものでもないはずです。

突然の圧力上昇が、最初の「水の源」を張り裂くという現象をもたらしながら、加圧された水は、そのところへ大波のように押し寄せ、すぐ地殻の隔壁をさらに弱くし、まもなく全世界に及ぶ連鎖反応に発展し、世界中の大いなる水の源が、ことごとく張り裂けるまでになったことでしょう。

これらの水源の破壊を伴った火山の大爆発は、水だけでなく地球のマントル（マントル＝地殻と核の間にある部分で、厚さ約三千キロと推定されている）から大量のマグマをあふれ出させたことでしょう。

さらに、ばく大な量の火山灰が吹き上げられ、それに伴って大量の霧状の水と大気圏に荒れ狂う暴風を引き起こしたことでしょう。大気のうねりと、膨張しながら冷却していく気体、凝結時に核となるのに役立つ大量の火山灰や他の粒子が、水蒸気から成る上の水の層に入り込み、そこで別の連鎖反応を引き起こしたと考えることができます。その結果、水蒸気は液化し、合わさって、まもなく地球全体にどしゃ降りの雨となって降り注ぎ始めたことでしょう。

現象全体はさらに多くの研究や分析を必要としますが、少なくとも一一節の単純な記述によって与えられている情報は、大洪水の物的原因を説明するのに必要な基本的な情報であるとの結論を下してよい理由があります。すなわち、すべては、最初に地球と陸地と水をお造りになった同じ神の摂理による監督の下にあったのですから。

天の「窓」（新改訳聖書では「水門」）ということばは、実に絵画的な表現で、多くの翻訳者たちは、「水門」とか「放水口」とかと訳していますが、その通常の意味は、単に「窓」です。いずれにせよ、以前は空に貯えられていた水が、急に解放されて地上に洪水をもたらした大量の水となったとの概念を伝えようとしていることは確かです。どしゃ降りの雨は、四節で神が前もって述べたように、四十日四十夜、またとない激しさで降り続いたのです。

七章一三～一六節　　その同じ日に、ノアと、ノアの子セム、ハム、ヤペテと、ノアの妻と、その子らの三人の妻とは共に箱船にはいった。またすべての種類の獣も、すべての種類の家畜も、地のすべての種類の這うものも、すべての種類の鳥も、すべての翼あるものも、皆はいった。すなわち命の息のあるすべての肉な

るものが、二つずつノアのもとにきて、箱船にはいった。そのはいったものは、すべて肉なるものの雄と雌とであって、神が彼に命じられたようにはいった。そこで主は彼のうしろの戸を閉ざされた。（協会訳）

記者は、後の世代の人々がこの話を信じるのが極めて困難だと見越していたかのように、箱船には動物が非常にたくさん入ったことを、もう一度強調しています。あらゆる種類の獣、野生の獣、家畜、はうもの、鳥、虫（ヘブル語では文字通りすべての種類の翼をもつあらゆる種類の小鳥）。実に、いのちの息あるすべての雄と雌が、箱船に入ったのです。さらに、ちょうど七日たった後のその最後の日、すなわち洪水が来た日に、ノアとその家族は、箱船に入りました。このことは、神のみことばが完全に正確であるという彼らの信仰をあかししています。恐れて時間よりも早く駆け込んだのではなく、生意気にも告げられた時間に遅れたのでもなかったのです。

ノアが恐らく最後だったでしょうが、すべてのものが中に入った時、驚くべきことが起こりました。「主は彼のうしろの戸を閉ざされた」のです。どのようにして戸を閉ざされたかは、聖書に書かれていませんが、箱船の戸は、人手を全く借りずに閉ざされ、封じられました。このことは、箱船に入った人々に彼らが神の御旨の中にあり、また保護の下にあるという最終的保証をも与えました。

今までの世界は、ノアたちにとって、その瞬間から永遠に接することはできなくなりました。彼らの人生は、この後新しい人生となり、彼らは新しい世界に生きることになるのです。大洪水がなかったら、不信仰な人々は、まもなくノアたちをも滅ぼしたでしょう。しかし、神が不信仰な者を滅ぼしている間に、箱船はノアたちを安全に守り、打ち寄せる洪水から守ったのです。同じように、私たちの罪のために死なれたキリストは、

罪に勝利したのです。「キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。私たちの神であり父である方のみこころによったのです」（ガラ一・四）。

大洪水は、地上でたけり狂い、水かさが徐々に増し、古い世界を破壊し、埋没させました。水面下であらゆるものを破滅しているまさに同じその水が、箱船とその中のノアたちと動物を守っていました。このようにさばきと死の水は、世をきよめる水であり、救出の水でもあったのです。この最初の大いなるパプテスマの型のように、私たちのバプテスマの水は、私たちを「救う」と言われています（Ⅰペテ一二・二〇、二一）。

古い生活の破滅から、新しい人生へ引き上げられることを、また、どんどんむしばまれていく状態から、神の子の栄光ある自由へと導かれることを、最も効果的に表わしています。

満ちあふれた水

ノアの洪水がどのようなものであったか、また、歴史上、本当にあったかどうかという問題は、聖書的キリスト教にとって極めて重要です。キリスト教と反キリスト教の問の論争は、すべてが洪水の事実の有無にかかっているのです。

進化論支持者たちが主張しているように、もし、生来の進化論的発展という原理で地球とその居住者を完全に説明できるのなら、創造主の存在を仮定する必要などありません。進化にとって主要な証拠は、地球の

歴史として仮定された何十億年と言われる地質学上の記録、すなわち地殻の堆積岩の中に埋蔵されている化石によって証明されるはずです。そして、このような説明のわく組みの中には、全世界を破滅させるような洪水を入れる余地がありません。それゆえ、もし、このような大洪水が実際に起こったのなら、地球の歴史を解釈するための指導原理としての斉一説と進化論の考えは、欺瞞と偽りに満ちたものであることが証明されるのです。

地球の歴史上、のろいの影響下に地球は非常に多くの苦しみを受けてきました。熱さと寒さ、洪水と干ばつ、地震と噴火など、あらゆる種類の自然界の激変が、地殻をかき乱し、地表に住むものをうろたえさせました。しかし、この大洪水の規模と範囲は、それらすべての大激変を合わせたものよりもけた外れに大きかったのです。現代の科学的世俗主義の時代においては、この過去の大きな出来事のつめあとは、ほとんど忘れ去られてしまいました。罪の恐ろしさのあかしと神の罰が現に存在するということは、人を非常に不安にさせるし、歓迎されないことでもあるので、人々は何世代にもわたって、なんとかしてそれを説明しないで忘れようとしてきました。

聖書は神の霊感によるとの信仰を表明している保守的クリスチャンですら、ノアの洪水の重要性をしばしば無視してきました。彼らは、進化論に立つ地質学者、古生物学者に脅迫され続けてきました。彼らは、過去百年以上にわたって、歴史の黎明期に全世界に及んだ洪水があったという考えを完全に拒絶し、地球の歴史はすべて現在起こっているのと同じ自然の過程が、常に長い年代にわたって作用し、ゆっくりと進展してきたという説明こそ正しいと主張しているのです。多くのクリスチャンは、ノアの洪水を局地的洪水として説明して、進化論地質学とうまく妥協させようとしてきました。その局地的洪水とは、ユーフラテス川など

中東の川の大氾濫によって生じたというのです。それゆえ、ここではまず、聖書の記録は、一つの全世界を滅ぼした大洪水をあかししているということを、はっきりさせなければなりません。

七章一七～一八節　それから、大洪水が、四十日間、地の上にあった。水かさが増していき、箱船を押し上げたので、それは、地から浮かび上がった。水はみなぎり、地の上に大いに増し、箱船は水面を漂った。

七章の次の数節に、聖書は全世界に及んだ洪水のことを述べているのであって、局地的洪水を述べているのではないことを証明する多くの理由を挙げています。そのうちのいくつかを列挙します。

1　著者が全世界に及ぶ洪水を記述しようという意図を持っていたなら、この部分と、六章から九章までの全記録の表現を、これ以上適切な表現に書き改めることはできない。少なくとも川の氾濫の記述としては、どう見ても明らかに誤った印象を与えるし、誇張したものである。

2　ノアの洪水が全世界的規模であったこととその結果についての表現が、六章から九章までに三十回以上出ている。

3　ノアの洪水は「四十日間、地の上にあった」（was）というよりもよい訳は、「地の上に来ていた」（was coming）である。七章一一、一二節の地殻にある大いなる水の源が張り裂ける現象を同時に伴って、四十日も降り続く雨は、現在の斉一的条件下では起こり得ない。

4　地上にやってきた洪水は、mabbul マッブール（ヘブル語）であり、この語はノアの洪水に関してだけ

用いられていることばである。通常、局地的洪水を表わすのに使われているヘブル語は、ここでは全く用いられていない。

5　洪水の水かさは、すぐに「箱船を押し上げる」のに十分な量に達した。このことは、洪水初期の段階に少なくとも六メートルの深さになったことを示している。なぜなら、箱船は、少なくとも十三メートルの高さで、荷物をたくさん積んでいたからである。前述のように、箱船は、単にある地域に住んでいる動物群を住まわせるためには大きすぎ、現在生きているものも絶滅したものも含め世界中の陸生生物を二匹ずつ、収容するのに十分であった。

6　雨が降り続いたので、水は「みなぎった」。このことばは、文字通りには「圧倒的に力強い」ことを表していて、局地的洪水の設定とは全く一致しない。ヨブ記一二章十五節では、水が「地をくつがえす」と述べられている。

7　「水面を漂う」ための箱船の建設、必需品の準備や食料の貯えは、洪水が局地的なものに過ぎないとすれば、全くばかげたことで、これらのすべては時間とお金の浪費であった。もし局地的な洪水であったなら、ノアや鳥や獣にとって、その地域から他の所へ移り住むことがより良い解決法だったであろう。

七章一九～二〇節　水は、いよいよ地の上に増し加わり、天の下にあるどの高い山々も、すべておおわれた。水は、その上さらに十五キュビト増し加わったので、山々はおおわれてしまった。

ノアの洪水の記録は、あらゆる点で目撃者の記事であることを示唆しています。そして、この記事はそも

そも、ノアかノアの息子たちのどちらか、おそらく息子たちによって書かれたことでしょう。記事が書き進められるにつれて、これらの目撃者が記録しようとしていたことは彼らが堅く信じていたことで、全世界に及ぶまたとない壊滅的な大洪水であったことが、いよいよ明らかになってきます。さらにいくつかの理由を述べると次の通りです。

8　水は「どの高い山々」もすべて覆った。ヘブル語では山々という同じことばが繰り返し、用いられていて、強調の意を表わしている。

9　一八節で、「みなぎる」と訳されていることばは、ただ単に水は、「圧倒的な力」があっただけではなく、地の上すべてに「これ以上ありえないほどに行き渡った」ことを示している。

10　「天の下にある」すべての高い山々も、少なくとも箱船の高さの半分に当たる十五キュビトの深さの水で覆われた。これは恐らく、喫水線の高さを表わしていて、箱船がすべての山々の上に自由に浮かんだことを告げている。これらの山々に、標高五千百メートルのアララテの山々が含まれていたのは明白である。五千百メートルにも達する洪水は、局地的洪水ではない。

11　山々は「おおわれた」。ここで用いられているヘブル語カサーは、非常に強調した意味を伝える語である。すなわち、いくつかの例でカサーが「圧倒的」と訳されているのは適訳と言える。水は、山々を水浸しにしただけではなく、実にそれらを洗い流したのである。

12　二つの最上級――「天の下にあるどの高い山々も、すべておおわれた。」ここで用いられている「すべて」という語は、局地的洪水説の支持者たちがしばしば主張するように、「相対的な」意味にとることはどうして

もできない。

七章二一節～二三節　こうして地の上を動いていたすべての肉なるものは、鳥も家畜も獣も地に群生するすべてのものも、またすべての人も死に絶えた。いのちの息を吹き込まれたもので、かわいた地の上にいたものはみな死んだ。こうして、主は地上のすべての生き物を、人をはじめ、動物、はうもの、空の鳥に至るまで消し去った。それらは、地から消し去られた。ただノアと、彼といっしょに箱船にいたものたちだけが残った。

13　「地の上を動いていたすべての肉なるものは……死に絶えた。」局地的洪水では、そこに住んでいるいろいろな動物の大部分は、水かさが増してくる時に、そこから逃げ出すか、または必要なら乾いた地に泳いで行って死を免れることができる。また、鳥なら、飛び去ることができる。しかし、全世界に及ぶ洪水の場合、このようなことは不可能であった。

14　まさに洪水の目的通りに、「すべての人」は死に絶えた。局地的洪水の場合、大部分の人は逃げられる。さらに、創世記に記述されている出来事と突き合わせてみると、その局地的洪水が起こったと推定される日付よりもはるかに早い時代に、古代人が地上のいたる所に住んでいたことは、少なくとも人類学者が算出しているように、疑問の余地はない。局地的洪水なら、すべての人々に及ぶはずがない。

15　「いのちの息」のあるすべてのものが死んだだけでなく、生きているすべてのものが滅ぼされた。いのちの息あるすべてのものには、人や動物が含まれ、いのちの息（ヘブル語で ruach ルアハ）を持った動物であ

ることをさらに強調している。一方、「生き物」と訳されたことばは、ヘブル語では yequm イェクームという一語で、申命記一一章六節では、単に「生き物」と訳されている。ここでは、その語は、明らかに動物とともに植物にも言及している。事実、神はノアに、「わたしは、彼ら（人）を地とともに滅ぼそう」（創六・一三）と告げられた。

16　箱船の中にいたノア及び彼とともにいた人々だけが、洪水を生き延びた。したがって、現在生きているすべての人はノアの三人の息子のすえである（創九・一、一九も見よ）。同様に、現在、乾いた地に住む動物は、箱船に乗っていたこれら動物のすえである（創八・一七、一九、九・一〇）。神の目的はまさにすべての生きている他の人々（創六・七）と地上の動物（創六・一七、七・二二）を滅ぼし尽くすことであった。

七章二四節　水は、百五十日間、地の上にふえ続けた。

「みなぎった」（協会訳）ということばが三度目に用いられています（一八節と二〇節の説明参照）。三度目は、水が百五十日増え続けた事を示しています。「大いなる水の源」や「天の窓」が閉ざされ（八・二）、水が退き始めたのは百五十日たってからでした。ノアの洪水の異常な長さは、洪水が全世界的であったとみなすための、よりしっかりした聖書的理由を指し示しています。

17　局地的洪水で百五十日も水がふえ続ける事はない。

18　水が退きはじめた後で、箱船がアララテ山の頂上に着地した（八・四）、他の山々の頂が見えはじめる

まで、さらに二か月半かかった（八・五）。

19　洪水の水が退きはじめてから四か月経ってからも、ノアが放ったハトは足を休める乾いた地を見いだすことが出来なかった（八・九）。

20　箱船に居住していた者に箱船から去ることを許可してよいほどに地が乾くのに一年以上かかった（七・一一、八・一三）。

前述のすべての事を考慮して、聖書を信じていると告白している人々が、局地的洪水説を是認できるとはとても考えられません。それにもかかわらず、多くの福音主義者が、現代の学者の主張に非常におじけついて、思いのほか早く、「神からの栄誉」を捨てて「人からの栄誉」を取る者と成るでしょう（ヨハ一二・四三）。上述の二十の理由の他に、全世界に及ぶ洪水があったと考えられる次のような聖書的理由を付け加えることができるでしょう。

21　八章二一節や九章一一、一五節で、このような洪水を決して送らないと再三にわたって神が約束されたことは、それが局地的洪水にすぎなかったとしたら、繰り返し破られたことになる。

22　新約聖書は通常のギリシア語の洪水ということばの代わりに、ノアの洪水を指すのに特別な用語（カタクルスモス＝大激変）を用いている（マタニ四・三九、ルカ一七・二七、Ⅱペテニ・五、三・六）。

23　ノアの洪水後、宇宙の条件が更新された。その中には、季節の区分けが明らかにされた（八・二二）、雨に伴う虹（二・五、九・一三～一四）及び人と野獣の敵意（九・二）などがある。

24　人の寿命が洪水後すぐに、長いゆっくりとした下降線をたどりはじめる（五章と一一章を比較せよ）。

25　モーセ以後の聖書記者が全世界的洪水を受け入れていた（ヨブ一二・一五、二二・一六、詩二九・一〇、一〇四・六～九、イザ五四・九、Ⅰペテ三・二〇、Ⅱペテニ・五、三・五、六、ヘブ一一・七を参照）。

26　主イエス・キリストは、洪水の史実性と世界的規模であったことを受け入れていた。そして、さらに洪水を、主が世をさばくために再び来られる時のしるしであり型であるとされた（マタニ四・三七～三九、ルカ一七・二六、二七）。

次項で特に言及するように、地質学上の強力な証拠は、斉一説や進化論にではなく、全世界的洪水にこそ有利なのです。とはいえ、真の、または、推定された地質学上の困難な問題にもかかわらず、聖書は、ノアの洪水の及ぶ範囲は全世界的規模で、その影響は激変的であったことを、明瞭に教えています。聖書を信じているクリスチャンに開かれた、筋の通ったただ一つのとるべき道は、地質学的資料を聖書の啓示に一致するように解釈しなおすことです。

洪水の後

聖書は明瞭に、創世記の洪水は全世界的であって局地的ではなかったと教えています。聖書には絶対に問

違いがないので、現代の地質学者が信じようが信じまいが、この洪水は全世界にまたがるものであったことを意味しています。

さらに、全世界的洪水が平穏な洪水であるはずがありません。全世界にわたっての平穏な洪水というのは、静かな爆発というのと同様に用語上矛盾したものです。大量の堆積物とあらゆる種類の重い物を浸食し運搬する流水の驚くべき能力は、局地的洪水を一度でも経験した人ならだれでもよく知っています。実際に、多くの地質学者は、大部分の地層は局地的洪水、または、局地的な激変で生じたと考えているのです。したがって、全世界的洪水なら、全世界にわたる地質学的影響をもたらしたに違いないのです。

特に、聖書に記録されているような洪水、百五十日も続いた全世界的豪雨と水の噴出なら、このような現象を引き起こしたのは当然のことです。このような洪水は、地表、または地表近くの地殻の初期の地形をすべて破壊したことでしょう。そして、これらの浸食された土壌は再び堆積し、全世界の地殻に、堆積によってできる成層岩を生じさせたはずです。

このような堆積岩が全世界に豊富にあるばかりでなく、急速に連続して起こった堆積の過程によって形成されたことを示す多くの証拠があります。一つ一つの地層はどれも、明らかにまとまって堆積したことを示す堆積単位で、水力学的分析で多くの累層が数分内に形成されたことを示すことができるのです。

さらに、一連の整合した地層の中に、どの地層でもそれにつづく各地層は、前の地層に引き続いてすぐ堆積しはじめたことを示し、時間的にもほぼ連続していることを示しています。一つの地層の面の上下の地層が、きちんと連続的に形成されたことを示していないとき、地質学者はこれを不整合と言いますが、かなりの時間的間隙があったとされるのです。しかしながら、全世界にわたる不整合はないので、だれでも常にどの地

層にもある程度の整合部位、その上に時間の間隙もなく他の地層が徐々に形成されたことを示す所を見いだします。

このような演繹的推論から得られる明らかな結論は、地質柱状図にある各地層が急速に形成されたのであり、各々の単位は次々と間を置かずに堆積されているので、全地層は急速に形成されたということです！

このように、地質学上の証拠は、斉一性というよりも一つの激変的説明を要求しています。例えば、全世界を取り巻く堆積岩の平均の厚さは、約一・六キロメートルであり、洪水の条件下に堆積する平均の割合は、五分毎に圧縮されて約二・五センチとなります。そうするとわずか二百二十日間で全地層を形成できるのです。

これらの堆積物の中に化石が存在することは、急速に堆積層が形成されたことのさらにすぐれた証拠です。化石はどこにでもあって非常に大切で、事実、どこでもその地層の地質年代を割り当てるのに、化石がその主な手段となっています。すなわち、含まれている化石の種類によって、進化論者が進化の段階を推定しているのです。化石の保持には、急速な埋没と化石化作用を要します。そうでなければ遺体は崩壊し去るか、または、腐肉を食う動物によってなくなったことでしょう。

地層を形成した堆積過程と、地層に含まれる化石の証拠に加えて、火成岩・変成岩、堆積岩のいろいろな種類すべては、現代「一般に言われている」斉一的過程では決して生じ得なかったことの強い証拠なのです。同様に、山脈、峡谷、沖積期の平原などのような地質構造も斉一的過程では決して生じ得なかったのは確かです。今日、ますます多くの進化論地質学者が、あらゆる種類の地形や地層は、少なくとも局地的洪水によって説明すべきだとの考えに立ち返っているのです。また、ますます多くの創造論に立つ地質学者や他の科学者は、これら局地的洪水すべてが、本質的に同じ時期に連続して起こったので、複雑な特徴をつくりだして

おり、これらは全世界的洪水以外のなにものでもないとの考えに立ち返りつつあります。明らかに、その激変は創世記の洪水でした。

八章一～二節　神は、ノアと、箱船の中に彼といっしょにいたすべての獣や、すべての家畜とを心に留めておられた。それで、神が地の上に風を吹き過ぎさせると、水は引き始めた。また、大いなる水の源と天の水門が閉ざされ、天からの大雨が、とどめられた。

ノアの洪水の水が百五十日にわたって「ふえ続けた」のち、「当時の世界（Ⅱペテ三・六）」を完全に滅ぼし、大量の生物の死骸が堆積物の中に埋没されたか、または、水に浮いたままにして、神は大洪水を終わりへと導かれました。神である主は、箱船にいるノアと動物を「覚えて」おられました。（もちろん、主は一度も彼らを忘れられたことはありません。ヘブル語では、〈彼らのために行動しはじめた〉という用語です。）そして、新しい世界で見いだす新しい生活へと、彼らが出発する準備は整いました。

神がとられた特別な行動には三つあります。すなわち、神は地の上を通過する風を起こされ、また、大いなる水の源がさらに爆発を起こすのをとどめられ、そして、天の窓を閉じられ、これ以上雨が降り注ぐことのないようにされました（後者の二つは、大いなる水の源と上の水は本質的にこの時までに空になったことを示す）。

「風」の性質と効果に関する検討は必要ですが、ここで再びヘブル語でルアハが用いられ、これは、本文に照らして「風」とも「霊」とも訳すことができます。実際にルアハは多くのいろいろな方法で訳されているので、

その本来の意味は、おそらく「見えない力」のようなものであったことでしょう。

ここでは神の霊のエネルギーを注入する力が意図されている可能性があります。すなわち、一章二節の、創造の第一日における神の霊の働きに似ています。ここでもまた、初めと同様に水は地の上を覆っています。神は、一章九節の創造に当たって用いられた力をもう一度用いて陸地と水を分けられました。

しかし、ここでは文脈上、神は目的達成のために摂理のうちに自然の力を用いられ実際の風をもたらしたと多くの注解者は考えています。すでに検討したように、洪水前の均一な気候では強い風は一切吹かなかったことでしょう。しかし、水蒸気の天蓋がなくなったため、際立った気候の差が熱帯地方と極地方にできあがり、空気の大きな動きが始まりました。これらは、間もなく地球の自転によって複雑になり、今日の複雑な気流系が最終的に始まったことでしょう。特に、初期にはかなり激しかったことでしょう。単なる大海原に、これらの風は、ものすごい波と海流を生じさせたはずで、特に赤道付近では、大量の水が蒸発したことでしょう。

超自然的過程によらなければ不可能ですが、もし風が、大量の水を外宇宙に吹きはらうほど激しくないなら、風や波や蒸発だけでは、水位の低下は少ししかありえなかったと思われます。ですから、何とかして地球の地形を、急激に変えて立てなおさなくてはなりませんでした。大いなる陸地を水の中から上昇させて、その陸地から流れこむ水を受けるために海洋底を深く沈め拡大したのでした。

詩篇一〇四篇六～九節によると実際に起こったことはまさに次の通りです。

「あなたは、深い水を衣のようにして、地をおおわれました。
水は、山々の上にとどまっていました。

水は、あなたに叱られて逃げ、あなたの雷の声で急ぎ去りました。
山は上がり、谷は沈みました。あなたが定めたその場所へと。
あなたは境を定め、水がそれを越えないようにされました。
水が再び地をおおうことのないようにされました。」

詩篇一〇四篇の初めの五節は創造の期間に当たります。

しかし、六節から九節までは洪水の期間に相当することが明らかです。そして、九節には、九章一一節の神とノアとの契約についての言及があります。洪水自体を通して、地殻の下にある複雑な貯水場である大いなる淵とその導水管が張り裂け、ものすごい熱エネルギーの放出があり、大量の水とマグマの流出は、確かに非常に不安定な条件を地殻にもたらしました。さらに、洪水前の山や大陸の浸食の結果、大量の堆積物を海にもたらしました。

これらの地下の大洞窟は、もはや加圧されないで、つぶれ、それに応じて洞窟の上にあった表土は沈下しました。大洞窟は主に洪水前の大陸の下にあったので、その当時の川の源になる貯水場として役立ちました。さらに、この時までに、これらの古い大陸は、洪水の浸食によって削りとられてしまったので、今や古い大洞窟は洪水後の大洋の海盆になりました。大洞窟がつぶれて水が洞窟の中に流れ込むにつれて、洪水の期間を通して洪水前の海に堆積した堆積層は、洪水前の海の上に宙づりになり洪水後の大陸となりました。洪水後の大陸はこの地域で起こった圧力の再調整のゆえに、実際に隆起し、さらに増大しました。新大陸に新しく堆積した堆積物は、以前の大洞窟からなる貯水場に落下した旧大陸の中心部ほど固くありませんでした。これが必然的に物質を新しい大陸に押しやり、新大陸をなお高く隆起させました。

明らかに、概略した前述の出来事は、単純化し過ぎていて、臆測によるのはやむを得ませんが、少なくとも一般的に起こったに違いないことを、入手できる聖書と科学の情報から許される範囲で筋を追って立て直したもので、最も論理的と思われます。大風と波が、落ち込む寸前の状態にあった空（から）の地下洞窟を沈下させるのに必要な力を引き起こす最後の一撃になったのかも知れません。

八章三～四節　そして、水は、しだいに地から引いていった。水は百五十日の終わりに減り始め、箱船は、第七の月の十七日に、アララテの山の上にとどまった。

以前の地表が新しい海盆を形成するために沈下し、また、以前の海底とそこに新しく堆積した層状の堆積物が新しい大陸を形成するために上昇する動きが地殻にいったん起こり始めると、水は「上昇しつつある陸地からしたたり落ち」次第にだんだんと地から引いていきました。ヘブル語の表現はまさに前述のような環境で起こり得るような実に急激な地盤沈下を指し示しています。

新しい陸地の表面が隆起するにつれて、火山山脈とか大きなバソリス（バソリス＝主として造山帯に分布する花こう岩質の大規模深成岩体で、露出面積が百平方キロ以上にわたるもの。底盤ともいう。シェラ・ネバダや他の多くの海岸山脈に見られる）を除いて、地表はたぶんほぼ平らになっていったことでしょう。火山山脈やバソリスは、大いなる深淵の源が張り裂けたことと関連して起こったマグマの活動で押し上げられたことでしょう。このような山脈は、主として、新しい海盆をとりまく傾向があり、前述の地の大洞窟の貯水場をふちどることになります。これらの場合を除いて、新しい大陸はほとんど平らに横たわる堆積層から

成る大高原を形成する傾向がありますが、火山による尖った山が所々に見られ、隆起する過程で、あるところでは地層が曲がったり重なったりしたことでしょう。

地形を詳細に調べて見ると、大陸の内部に巨大な湖がしばらく存在し、そこから大きな川が形成され、その際、一気に流出した大量の水は急速に大きな峡谷をえぐりだし、その下流流域に大量の洪水の土砂を堆積させたことでしょう。世界のいたるところにある内陸の湖や海の水位が、つい最近までもっと高かった証拠を示しているのは重要です。また、どこの川も、かつては現在よりももっと大量の水と堆積物を運搬していたことを示しています。これらの、また、これらと関連している現象が、数千年前に全世界に及ぶ洪水があったことを示す地質学上の証拠を、今もなお提供しつづけているのです。

広範な地質学的議論を聖書注解で取り扱うことはできませんので、この問題に興味をもっておられる方は、拙著の The Genesis Flood（創世記の洪水）をご利用ください。この問題をこまかく取り扱っています。

洪水の初期の火山活動で形成された山脈の一つがアララテ山で、現在、アルメニア地方の高地にある他の似た山々も同じ頃形成されたことでしょう。高さ五千百メートルのアララテ山をも含めアララテ山地方には、深い水の下で形成された密度の高い溶岩、枕状溶岩として知られている岩石がたくさんあります。また、この山には、海生生物の化石を含んだ堆積岩の層があります。

洪水の水が一五〇日たって引き始めたとき、箱船が着地したのはこの山だと思われます。イラク、セイロン島、インドその他の地にある山々に着地した可能性も示唆されていますが、何と言っても証拠は、アララテがいまだにその可能性が最も高いことを示唆しています。この地方全体は後に、エレミヤ書五一章二七節にあるようにアララテとして知られるようになりましたが、ヘブル語のアララテ（エレ五一・二七）は、ギリ

シア語のアルメニア（Ⅱ列一九・三七、一九・三七、イザ三七・三八）と同じ意味で、聖書は、箱船はアララテの山々のどこかに着地したとだけ述べています。しかしながら、アララテ山はその地方では群を抜いて高い山です（八・五）。このような記述が可能な山は、今日のアララテ山を除いて他にはありません。さらに、探検家や旅行者などかなり多くの人々が箱船を目撃したとの報告を、十九世紀にもたらしています。このようなことは、古代や中世代にもあったそうです。箱船が再び着地した所を適当な参考文献を利用して見いだそうと、多くの探検が現在もなされていますが、今までのところ成功していません。今までなされた報告では、箱船の適切な証明はありません。もし、成功したら、これこそすべての時代を通しての最も重要な考古学上の発見となるに違いありません。

罪とさばきから箱船に入っていた者を救う働きを完成するのに、あたかも五か月間も仕事をしつづけていたかのように、箱船は〝休んだ〟と言われていることは大切です。これは聖書に二回目に出てくる「休まれた」ということばです。一回目は、神が創造のわざを終えられて休まれた時です。創世記二章二、三節と今回とは実際には異なることばが用いられていますが、ヘブル語では、同意語です。前に間接的に述べたように、箱船がキリストの真の型であるなら、用語が異なるが同意語であるということは最も適切です。神が創造のわざを終えられたように、また、箱船がその使命を果し終えたように、キリストもヨハネの福音書一九章三〇節の通り、救いのみわざを完成されました。

箱船が第七の月の十七日にとどまったこともまた大切だと考えられます。七章一一節の検討で、ノアの洪水が始まった正確な日付である第二の月の十七日が記されている理由が、はっきりしていないことがわかりました。可能性のある理由が、類型的な推論との関係で、ここに表わされています。また、主イエス・キリ

ストは第二の月の十七日に死からよみがえられました。ユダヤ人の暦で第七の月、すなわち、おそらくここ創世記七から八章で用いられていた暦です。後に宗教暦で第一の月とされました。そして過越は、出エジプト記一二章二節のようにその月の第十四日に定められました。私たちの過越の小羊であるイエス・キリストは、コリント人への手紙第一、五章七節のようにその日に葬られましたが、三日後によみがえられました。それはユダヤ暦の第七の月の十七日に当たります。

八章五～一二節　水は第十の月まで、ますます減り続け、第十の月の一日に、山々の頂が現われた。四十日の終わりになって、ノアは、自分の造った箱船の窓を開き、烏を放った。するとそれは、水が地からかわききるまで、出たり、戻ったりしていた。また、彼は水が地の面から引いたかどうかを見るために、鳩を彼のもとから放った。鳩は、その足を休める場所が見あたらなかったので、箱船の彼のもとに帰って来た。水が全地の面にあったからである。彼は手を差し伸べて鳩を捕え、箱船の自分のところに入れた。それからなお七日待って、再び鳩を箱船から放った。鳩は夕方になって、彼のもとに帰って来た。すると見よ。むしり取ったばかりのオリーブの若葉がそのくちばしにあるではないか。それで、ノアは水が地から引いたのを知った。それからなお、七日待って、彼は鳩を放った。鳩はもう彼のところに戻って来なかった。

再び地上に安全に着地して、ノアとその家族は、水が十分に引いて上陸できるようになるまで、待たなければなりませんでした。そういうわけで、一年を少し超える期間、すなわち合わせて三七一日間箱船にとどまっていなければなりませんでした。二か月半の後、近くにある少し低い山々の頂を見ることができました。

四十日後、ノアは烏を放ちました。そして、七日後、鳩を箱船から解き放ちました。鳩は戻って来ましたが、汚ない(不潔な)地表にとどまることを気にしない腐肉を食う烏である烏は地表にとどまりました。一週間後、ノアは再び鳩を解き放ちました。このとき、鳩は新しいオリーブの木の折れた枝から若枝が、また、種から芽生えた若木が山肌に再び成長し始めたことを示していました。

このことは、強いオリーブの木の折れた枝から若枝が、また、種から芽生えた若木が山肌に再び成長し始めたことを示していました。

この物語で「七日」に関連する事項がしばしば見られること（七・四、一〇、八・一〇、一二）は、これらの日がなにか安息日であったことを思い付かせてくれます。しかし、これらの記述の最初と二回目の間にある週は割り切れません。すなわち何週目とはならないのです。したがって、これは疑わしいのです。

この記録は完全に年代順に詳しく述べられてはいませんが、ノアが洪水の始まりから二六四日目に烏を放ち、二七一日目に鳩を放ったと見るのが最も可能性があるようです。鳩は再び放たれ、二七八日目にはオリーブの葉をくわえて戻ってきました。

八章一三～一四節　ノアの生涯の第六百一年の第一の月の一日になって、水は地上からかわき始めた。ノアが、箱船のおおいを取り去って、ながめると、見よ、地の面は、かわいていた。第二の月の二十七日、地はかわききった。

七日後、二八五日目に、ノアは再び鳩を送りだしました。鳩は今度は帰りませんでした。このことは、陸地が十分にかわいたこと、烏のいのちを支えるために十分な植物があることを示していました。ノアはさら

に二十九日待って、ノアの洪水が始まってから三一四日後の第一の月の第一日に、箱船の屋根の一部と思われる箱船のおおいを取り除きました。ノアは自分でかわいた地を見ました。しかしながら、ノアは、まだ多くの水が周囲にあって、全般的に人の住めない不毛の地が広がっているのを見たに違いありません。こうして、ノアはなお五十七日、洪水が始まってから三七一日まで待って、箱船を去り、新世界での生活に着手しました。これは第二の月の二十七日でした。これらの一か月の長さは、七章一一、二四節、八章三、四節にある資料からみて、三十日であったと思われます。ノアの大洪水は、第二の月の十七日に始まりました。したがって、ノアとその家族が箱船にいた日数は全部で三七一日、正確に五十三週の期間でした。

新世界

世界はノアの大洪水で絶滅させられたのではなく、徹底的に変えられてしまいました。使徒ペテロが、ペテロの手紙第二、三章六節で、「当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました」と言っていますが、その神の恐ろしい怒りが過ぎ去るまで彼らを保護していた箱船を去った時、ノアとその家族は、真に新しい世界である陸地に第一歩を踏み出したのでした。箱船は、古い宇宙から恐ろしい大激変を通して現在の宇宙へ渡って来るための橋となりました。それはこわれやすく、容易に破壊されてしまう橋であり、そして現在の宇宙は、ペテロの手紙第二、三章七節に「今の天と地は……」と言われている宇宙です。

かつては、動物と人と繁茂した植物で充満していた陸地は、荒れ果てた荒野に変わってしまいました。以前は暖かく穏やかであった空気は、今や激しく、時には猛烈な風をもたらすものに変わりました。そして、箱船がとどまった山の斜面は冷え冷えとしていました。かつて、絶えず晴れ渡り、輝いていた空には暗雲がただよい、もっと雨が降りそうで、再び洪水をもたらす危険をはらんでいるかのように思われました。しかし同時に、自然界の美を無駄にするかのように、邪悪な集団を一掃してしまい、神はアダムの子孫のために新しい門出のすばらしい機会を与えてくれました。

ノアの洪水後に起こったと思われる幾つかの自然界の変化は、次のようです。

1　海洋は大規模な広がりをもつようになった。なぜなら、今や海洋には、かつての「天蓋」の上の水と「深淵」にあった地下の貯水場の水のすべてが入ってしまったからである。

2　陸地は洪水前に比べて著しく小さくなった。こういうわけで、地表の大部分は人の住めない所となった。

3　その下の大気に温室効果をもたらしていた水蒸気の天蓋は消え去った。したがって、大きな温度差が生じた。極地帯に雪と氷が徐々に積み上げられた。こうして、北極圏、南極圏の地表の大部分もまた事実上人の住めない所となった。

4　洪水後に隆起した山脈は、洪水を生きのびた人々にとって荒れ果てて住みにくい地形となり、これらの多くの地域は人の住みかとして適さなくなった。

5　今や、風と嵐、雨と雲が起こり得る環境となり、ついに、ほとんどすべての環境は、人や動物にとって以前ほど適さなくなった。

6　宇宙からの有害な放射線のために環境はますます人の居住に適さなくなった。もはや、有害な放射線の地上への侵入を防ぐ水蒸気の天蓋はなくなり、放射線は環境の悪化に荷担するその他の要因と共に働いて、人の寿命を徐々に短くした。

7　巨大で途方もない氷河、川、湖がしばらく存在したが、地球は徐々に今日のように年間降水量の少ない状態になってきた。

8　地下大洞窟の崩壊と洪水後の隆起によって生じたひどい地形学上の動きと地殻均衡運動（地殻均衡上からの重いものの圧力によって地殻は自然に動いて平衡を保つこと）のために、地殻は一般に不安定な状態にあった。その反映として世界のどこででも何世紀にもわたり、ある程度は現在に至るまでくりかえし火山が爆発し、地震が起こってきた。

9　地表の下に埋没した種子や木の切り株が芽を出し、植物の生命活動が再び強くなるまでは、陸地には植物は乏しかった。

10　もし、一年が本当に三六〇日の長さであったなら、地球の自転速度は一・五％くらい速かった可能性さえある。

陸地の上にばらまかれたものの中には、たまたまノアの大洪水にまき込まれた動物や人の腐敗しつつある死体や骨が散乱していました。洪水前の世界での神に対する不遜と、生き残った人々を神のさばきから救い出されたことを生き生きと思い出させるものでした。おそらく、新しい陸地の表面は、主として洪水前の海から形成されたことでしょう。海は堆積物で満たされてから隆起しました。このような残骸の多くのものは、

陸地の表面の下にある堆積物の中に埋め込まれました。

堆積物として沈み腐敗し溶解した水中に存在した接着物質の作用で、これらの堆積物は急速に化石化していきました。こうして、現在、世界中どこででも発見される化石を含んだ堆積岩の大地層となりました。このように保存されている化石は、堆積物の中を至る所にちらばってばらまかれたのではなく、通常、底の方の非常に単純な海生無脊椎動物から、最上層近くにある複雑な陸生脊椎動物まで、ある種の統計上の順序で堆積されました。

これらの順序は、（1）自然界での生育地が高いほど化石は上の方に集積し、彼らが生活していた同じ生態学的共同体との関係で埋没される傾向がある。（2）侵入してくる洪水の水から逃れる能力の大きいものほど上の方に埋没する傾向がある。（3）水力学的力に抵抗して浮き上がる傾向の大きい物ほど上の層に、しかも遠くまで運搬され、ゆっくり堆積する傾向があるなどです。こうして、一般に、どのような部位であっても、類似した種類の生物は同じ高さで、異なる種類の生物は、大きさと複雑さの順序で埋没される一定の傾向があるはずです。

この順序はまさに堆積岩の中に通常見られる順序です。もちろん、統計学上の例外はたくさんありますが、それはちょうど、ノアの大洪水で起こったような大激変的現象で予想されるようなものです。こうして、聖書で概括的に記録されている「洪水モデル」に基づいての予告を、明らかに裏付けているのです。しかしながら、地質時代の長い時間かかって、生物は単純な海生無脊椎動物から複雑な陸生動物に進化したという近代の斉一説に立つ地質学者の教えによって、誤った説明に到達してしまったのは嘆かわしいことです。

進化論者は、仮定した「地質時代」を仮定上の年代順に配列しました。しかも、意図的に結晶岩の上に堆

積した堆積岩からなる「地質柱状図」を垂直に底から頂上へと引き伸ばしました。これら岩石中に発見される化石は、単純なものから複雑なものへ生じたと想像されており、生物進化説の最もすばらしい証拠となっています。こうして、もし、化石化した堆積物が、何百万年もかかって生存競争を生き抜いて生物が進化してきた過程を示す代わりに、ノアの洪水の年に主として堆積した記録なら、進化の全体系は科学的に破産します。それゆえ、地質時代の概念がこんなにも熱狂的に弁護され「洪水地質学」が嘲笑され無視されるのは不思議ではありません。

また、いわゆる地質柱状図にある通り堆積している地層は世界のどこにもないことを、私たちはだれでも認めるべきです。これらの地質年代の化石が縦に少しでもつながっている所、または、その一部が、どこの地層をとっても見いだせる可能性はあります。どの時代の化石でも、底にあったり、頂上にあったり、またはそれらの間のどこにでもあり得るのです。地層の積み重なり、または、地層の形成についてのその他の特徴よりも、そこに含まれている化石がそれぞれの地層の年代を決める要素となります。こうして、進化の学説が、地質柱状図を作り上げる前提になっているのです。そして逆に、地質柱状図は進化論の主な証拠とみなされているのです。

しかしながら、地質柱状図にある化石は、死を雄弁に物語り、したがって、これらの化石はアダムの堕落と神の呪いの後に堆積したに違いありません。こうして、聖書と科学の資料が共に正しく理解されると、地球にある巨大な化石の墓場は、大部分ノアの洪水と洪水後の影響で埋没したに違いないことが示されるのです。岩石に見られる記録は、進化のあかしではなく、むしろ、罪に対する神の主権とさばきを示しているのです。

八章一五～一九節　そこで、神はノアに告げて仰せられた。「あなたは、あなたの妻と、あなたの息子たちと、息子たちの妻といっしょに箱船から出なさい。あなたといっしょにいるすべての肉なるものの生き物、すなわち鳥や家畜や地をはうすべてのものを、あなたといっしょに連れ出しなさい。それらが地に群がり、地の上で生み、そしてふえるようにしなさい。」そこで、ノアは、息子たちや彼の妻や、息子たちの妻といっしょに外に出た。すべての獣、すべてのはうもの、すべての鳥、すべて地の上を動くものは、おのおのその種類にしたがって、箱船から出て来た。

一年と十七日前に、神はノアに「あなたとあなたの全家族とは、箱船にはいりなさい」（創七・一）と言われました。しかし、今回、神は、「あなたは、あなたの妻と、あなたの息子たちと、息子たちの妻といっしょに箱船から出なさい」と言われました。これら二つの命令は相入れないものではなくお互いに補い合う相補的なもので、補い合っているキリストの二つの戒めを私たちに思い出させます。最初に、キリストは、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタ一一・二八）と言われました。

この戒めはノアの預言的名前の真の意味は「休息」であったことに照らして実に意義深いのです。この戒めは、マルコの福音書一六章一五節の「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい」という大命令の準備にすぎません。箱船は羊のための大きな囲いのようなもので、キリストは門であり、キリストを通して羊（人々）は「はいって」救われますが、また、キリストにあって羊（人々）は「出入りし、牧草を見つけます」（ヨハ一〇・九）。

長い休みから目覚めた箱船の中にいた動物たちは、「それらが地に群がり、地の上で生み、そしてふえるように」指示され、外に引き出されました。動物とその子孫は徐々にアララテから広がり、生息上彼らに必要な環境、すなわち他の動植物のいる生物学的共同社会を見いだすまで何代にもわたって移住し増え広がりました。聖書は明らかに「すべての獣、すべてのはうもの、すべての鳥、すべての地の上を動くものは、おのおのその種類にしたがって、箱船から出て来た」とくどくどと述べています。それゆえ、現在、地上の乾いた地に住む動物は、箱船にいた動物の子孫です。

同じように、現在のすべての部族や民族は、ノアの家族の子孫です。「この三人がノアの息子で、彼らから全世界の民は分かれ出た」（創九・一九）。

動物と人々が後に、アララテ山からあらゆる方向に出て行ったとき、どこに行っても彼らの行く手にまだ開拓されていない地がありました。東に向かったものはアジアに、西に向かったものはヨーロッパに、南に向かったものはアフリカに移住することができました。子孫のあるものはアメリカへの橋渡しとして現在ベーリング海峡になっている所に陸橋を見つけだしました。

他のものはマレーシア海峡を下りニューギニアやオーストラリアに至る同様の陸橋を見つけました。このような陸橋が氷河時代に存在していたことが地質学的に知られています。その時代は、巨大な氷原（氷原＝氷河が広い面積の陸地表面を覆っている状態で、今は南極大陸やグリーンランドで見られる。氷河時代にはヨーロッパや北米を覆っていた）に大量の水が取り込まれていたためにかなり海面が低くなりました。おもしろいことに、現代のコンピュータによる研究で、地球の陸地の地理学的中心はアララテ山の近くに位置していることがわかりました。このような一致は、神の摂理以外の何ものでもありません。

生存競争の欠如が、急速に動物の集団が増え広がることを可能にしました。そうして、他のグループを鼓舞して各々が自分に最も適した生態学的居住区を発見するまで前進させつづけました。急速な増加と、小さな集団内での同血統繁殖と、急速な環境の変化というこれらの条件が、各々の種に急速な変化を起こすのに最も理想的なものでした。（進化ではなく最初に創造された各々の種の遺伝子系にそなわっていた潜在的変異能力にとって、異なる変種を明白に発現させる機会となったのです。）したがって、現代の分類学者によって勝手に定義された種、ある場合には属にさえ見られるいろいろな変異は、急速に進展して適当な環境の土地に定着しました。

神は創造された各々の種に、広範な適応能力と変異性を持つ遺伝的要因を設定されましたが（特に、このことは、きよい動物の場合に真実で）、彼らは多くの異なる環境に適応することが可能でしたが、それにもかかわらず、この変異の能力には限界がありました。ある種が大いに変化して他の異なる種になるということは決してあり得ません。「種類にしたがって」というのが神の原則でした。洪水の後、環境がまったくひどい状態に変わってしまったので、環境に適応できなくなった多くの種類の動物がありました。特に、極端に特殊化したり異常に大きくなった動物はそうです。多くの世代を経て結局、これらのものは絶滅してゆきました。このグループに含まれるものには過去の恐竜、翼竜、肉歯亜目の動物、アルマジロ類の巨大な哺乳動物、その他の一風変わった動物がありました。

これらの多くのものは、恐らく氷河時代を通して絶滅したことでしょう。ノアの大洪水につづいて起こった気象のひどい変化は、全世界を覆って温室効果を維持していた水蒸気の天蓋の降下によって引き起こされ、両極に近い地方に厚い雪と氷の層を集結しました。これらは結局、大陸の広範にわたるとてつもない大きさ

の氷原を形成し四方八方に広がったのです。そして、氷河は北ヨーロッパを覆い、北半球にあるアメリカ合衆国の北三分の一まで覆ったのです。氷河時代は進化論地質学者が信じているように数百万年ではなく、恐らく数百年から千年位続いたことでしょう。そして地上の動物に甚大な影響を及ぼしたのは確かです。

八章二〇節　ノアは、主のために祭壇を築き、すべてのきよい家畜と、すべてのきよい鳥のうちから幾つかを選び取って、祭壇の上で全焼のいけにえをささげた。

目の前にあるこのような近づきがたい予期しない光景に接し、そして大雨や地殻の隆起が近い内にまたいつ起こるかもしれない差し迫った危機を感じて、ノアは、当然のことですがその思いを神に向けました。エデンの園以来、神に近づく方法は、動物を犠牲としてささげることによってなされてきました。したがって、ノアはこの目的のためにきよい動物を一匹ずつ余分に箱船に乗せていました。ノアはおそらくアララテ山のふもとのゆるやかな傾斜地まで下ってから、すぐに祭壇を築き、犠牲をささげるため、すべてのきよい動物とすべてのきよい鳥を、全焼のいけにえとしてささげました。

これが聖書で「祭壇」について述べられている最初で、これらは感謝と和解のためのいけにえでした。ノアは洪水前の世界の堕落からの救いと洪水から守られたことを感謝し、さらに、新しい世界に住む子孫のために、彼らの生涯が保護され、地球が再び滅ぼされないようにとりなしの祈りをしました。これはノアの立場で、これは確かにたいへん気前のよい動物のささげものでした。多分きよい動物は、主として、家畜であったと思われます。それらの各々は、ノアにとって最も必要なもので、それに対するノアの愛とあわれみはなみなみならぬものであったことでしょう。実際に、ノアはすべての群れのうちから七分の一を神にささげました。これに要する信仰は決して小さなものではなく、そのため多くの感謝と祈りをささげたのでした。こうして、ノアは強い信仰の人であることを身をもってあかししました。

八章二一節　主は、そのなだめのかおりをかがれ、主は心の中でこう仰せられた。「わたしは、決して再び人のゆえに、この地をのろうことはすまい。人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ。わたしは、決して再び、わたしがしたように、すべての生き物を打ち滅ぼすことはすまい。」

「主は、そのなだめのかおりをかがれ」た。すなわち、ノアの祈りはおそらくことばにはならなかったけれども、神はその信仰の祈りを聞き入れられました。その祈りは全焼のいけにえのこうばしい香りとして立ちのぼったと言い表わされています。しかし、私たちをも含めてまだ生まれていなかった世代は、ノアのとりなしのささげものによって益を受けています。そして、神はそのささげものに答えておられます。

神は、まず第一に彼らの当面の恐れを取り除くために、たった今、彼らが経験したような大災害で地を打って、地上の生物を、再び打ち滅ぼすことは決してしないと約束しました。八章二一節ののろいは、ノアの大洪水ではなく、第一に三章一七節ののろいで、こののろいは黙示録二二章三節の新しい地球が創造されるまでつづきます。このことは、三章一七節と八章二一節のことばが非常によく似ていることから明らかです。「人のゆえに、この地をのろう」と言われていますが、「人」はヘブル語ではアダムと同じことばです。主がのろわれた地に関して、ノアは慰めを与えてくれるであろうが（創五・二九）、神はこの際、アダムに下されたの

ろいを取り除かれたのではありません。むしろ、人の支配下に置かれたものに対して、全世界的さばきを決してしないと約束して言われたのです。そのさばきとは、エデンでのアダムにあるものはすべて死ぬという規定、または、ノアの時代に地上にあるすべてのものを襲った死であって、これら二つは全世界に影響しました。神はエデンで宣言されたのろいにつけ加えて、また地をのろうことはしないし、ノアの大洪水で神がのろわれたようにすべての生き物をまた滅ぼすこともしないのです。

初めは、この約束の理由は変に思われます。なぜなら、「人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ」とあるからです。このことは神の愛と恵みに一見大いに矛盾していることを除くと、地を打たないという約束よりも地を打つことを正当化しているように思われます。ここでは、神学者たちが原罪と普遍的堕落と呼んでいることと、神の罪を贖う恵みの両方をあかししています。

人の思いは罪の中に芽生えはぐくまれたものですから、人は自分自身を救うことはできないので、どうしても神の恵みが必要なのです。罪を贖う犠牲に基づいて、神の救いと祝福は信仰を通して受け入れられます。このように、人は自分自身を救えないからこそ、神は人を救います。本当に、神は恵み深い方です！　ノアは「主の心にかなっていた」（創六・八）のです。そして、彼の信仰にある従順と信仰によるささげもののゆえに、ノアの大勢の子孫が恵みにあずかりました。五章二九節にあるように、主がこの地をのろわれたゆえに、私たちは働き、この手で苦労しているが、この私たちに、ノアは実際に慰めを与えてくれたのでした。

現状の世界が続く限り、地にも、生きているすべての人に対しても、決して再び全世界的さばきをなさらないけれども、それでも、やがて生まれて来るすべての人が容易に見ることのできる絶え間ないあかしとなるはずです。アダムの罪に対する神ののろいのあかしは、自然科学の根本的法則のしくみ、すなわち、熱力

学の第二法則に見いだされます。ノアの洪水の証拠は、地殻の表面にある岩石の構造に全世界にある化石の墓場に、また、どこにでもある大激変の証拠に見いだされます。人のねじけて堕落した性質は、神のさばきの証拠を、二つとも進化論と斉一説の体系へとまげてしまいました。ペテロが言っているように、故意に無視するのです（Ⅱペテ三・五）。それにもかかわらず、見る目をもっている人にとっては、神のさばきについての証拠はどこにでもあるのです。「……あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです」（Ⅱペテ三・九）。

八章二二節　地の続くかぎり、種蒔きと刈り入れ、寒さと暑さ、夏と冬、昼と夜とは、やむことはない。

ノアに対する神の恵み深い約束の期間は、「地の続くかぎり」のはずです。しかしながら、いつか「主の日が来ます」。その時には、「地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます」（Ⅱペテ三・一〇）。そのときまさに地球の諸元素は崩壊し、これらの諸元素に課せられた神の呪いの結果は、すべて取り去られ、その後これら諸元素はもう一度いっしょになります（黙二一・一～五、二二・三、ロマ八・二一）。岩石中の化石は、全世界に大激変をもたらしたノアの洪水の証拠とともにまた崩壊し消え去るでしょう。

しかし、その日まで、自然過程に不変性を期待するのです。地球の自然過程の大部分は、いずれにしても地球の自転と太陽を中心に回転する公転の恒久性に依存し、すべての日変動、または年変動を、特に、新しい現在の水の循環と季節の周期をコントロールしているのです。

地球の自然状況は、ノアの洪水によって大いに変化し、そして、自然界に起こる過程はいろいろな面でそ

の性質を変えました。現在の水の循環は徐々に整ってきました。太陽の放射エネルギーは、大洋から蒸発によって大量の水を引き上げる働きをし、ついで風は内陸に水を移動させ、さらにそれが雲になって凝結し、雨や雪として陸地に降り、最後に、川、または地下水脈を通って流れ下り、再び海に戻ります。この現在の水の循環は、多くの異なる方法で、現在地上にいる生命の維持に驚くほど役立っています。その役割はしばしば聖書の中で言及され、常に科学的に驚くほど正確です（例えば詩三三・七、一三五・七、伝一・六、七、ヨブ二六・八、三六・二七、二八、イザ五五・一〇）。新しい水の循環が雨を生じ、時には洪水をもたらしますが、神は、地上にいるすべての生き物を滅ぼすような全世界に及ぶ洪水を再びもたらすことはしないと、ノアに約束しました。事実、神はノアに、その時から四季がきまって巡ってくることや、昼夜のきまった周期など、自然の整然とした秩序がその時からおとずれることを約束しました。

こうして、現代の科学者が「斉一性の原理」として組織的に述べている自然界の規則正しい運行は、洪水後、神によって制定されました。季節、暑さ、寒さ、昼と夜は今は基本的に太陽によってコントロールされています。そして太陽が事実上、地上の自然界の過程に必要なすべてのエネルギーを供給しています。地球の太陽を巡る公転、その回転軸と傾き、及び地球のすばらしい大気も自然界のこれら不変性を確立するのに役立っています。この不変性は、順次、多くの他の地質学的過程を統制しているのです。

このように、季節と昼夜のサイクルについて約束された斉一性は、他のすべての自然過程が本質的に斉一的であることを意味します。もちろん、現代の科学者が実際に観察し、記述し、分析できるのは、現在のこれらの過程にすぎないのです。過去でも未来でもなく、現在が真の科学にとってふさわしい領域なのです。